

20:1 の場合が最高の標識率を示したので、以後この量比で反応を行った。

ヒト甲状腺未分化癌を移植したヌードマウスにて体内分布を検討した。投与後 7 日においても腫瘍の描出は十分ではなく肝腎への集積が高かった。しかし腫瘍摂取および腫瘍対血液比は $0.88 \pm 0.09\% \text{ ID/g}$, 5.5 ± 3.4 であり、I-131 標識よりも数値としては良好であった。

8. In-111 標識抗大腸癌モノクローナル抗体 19-9 F(ab')₂, 17-1A F(ab')₂ を用いた腫瘍イメージングに関する基礎的検討

川畑 鈴佳 (映寿会病院)
小泉 潔 油野 民雄 渡辺 直人
秀毛 範至 利波 紀久 久田 欣一
(金沢大・核)

抗大腸癌モノクローナル抗体である 19-9, 17-1A の F(ab')₂ フラグメントを In-111 で標識し、腫瘍イメージングにおける有用性を検討した。In-111 19-9 F(ab')₂ は、大腸癌細胞 colo-201 との cell binding assay において、高い結合率を示した。手術および剖検で得られた人癌組織との assay では、大腸癌 3 例、胃癌 1 例中すべてにおいて、control に比較して In-111 17-1A F(ab')₂ の強い結合が認められたが、In-111 19-9 F(ab')₂ では、control と大きな差はなかった。担癌マウスのイメージングでは、腫瘍に In-111 19-9 F(ab')₂ の良好な集積を認めた。以上から、19-9, 17-1A は、腫瘍診断に有用であると思われる。

9. 手術、放射性ヨード、化学療法が有効であった甲状腺髄様癌の 1 例

多田 明 高仲 強 立野 育郎
(国立金沢病院・放)
高松 脩 (同・外)
渡辺駿七郎 (同・病理)

58歳女性、1966年、38歳時に甲状腺癌の手術を他院で受けている。当時の病理診断は濾胞腺癌であった。1976年、48歳時に右頸部リンパ節腫大、1977年1月右頸部リンパ節と残存甲状腺の摘出術を行う。このとき病理診断は髄様癌であった。1981年アドリアマイシン合

計 100 mg, 1982年アクラシノン合計 320 mg を使用。1982年2月に放射性ヨードの集積が認められ、100 mCi 投与した。1985年カルチトニンは治療前の3分の1に減少し、放射性ヨードの集積も著減した。病理診断に変更があった症例であるが、カルチトニン高値から髄様癌があったことは確実であり、放射性ヨード、化学療法など集学的治療が奏効したと考えられた。

10. ⁶⁷Ga と CT による縦隔、肺門部の検討 ——その2——

外山 宏 竹内 昭 真下 伸一
竹下 元 安野 泰史 藤井 直子
斉藤 隆司 河村 敏起 伊藤 毅
伊藤 清信 大橋 一郎 片田 和広
古賀 佑彦 (藤田学園・放)

⁶⁷Ga と CT が1か月以内に行われた 260 例を肺門部、縦隔部に関しおのおの Grade 別に対比しそれぞれの所見に discrepancy の認められたものの背景を検討した。⁶⁷Ga で強い集積を認め、CT で無所見のものは、肺門部 4 例中 3 例は解剖学的同定の誤り、1 例不明、縦隔部 1 例は ⁶⁷Ga で胸腺浸潤が疑われた ML の 1 例であった。CT で腫瘍を認め、⁶⁷Ga で集積を認めないものは肺門部 3 例中 1 例化学療法、2 例不明、縦隔部 5 例中 1 例化学療法、2 例放射線療法、2 例不明であった。化学療法の 1 例は骨髄抑制による影響と考えられたが、他の 1 例と放射線療法 2 例は治療効果の反映と思われた。

11. 肺癌 Staging における ⁶⁷Ga シンチグラフィの役割

二谷 立介 瀬戸 光 亀井 哲也
古本 尚文 関 宏恭 瀧 邦康
征矢 敏雄 中嶋 愛子 羽田 陸朗
柿下 正雄 (富山医薬大・放)
小山 信二 龍村 俊樹 山本 恵一
(同・一外)

緒言：従来より、肺癌の評価は Ga シンチグラフィの主要な適応の一つである。しかし肺門および縦隔リンパ節転移の検出率は、特に病理所見と比較すると、必ずしも高くないとされている。本演題では肺癌の staging